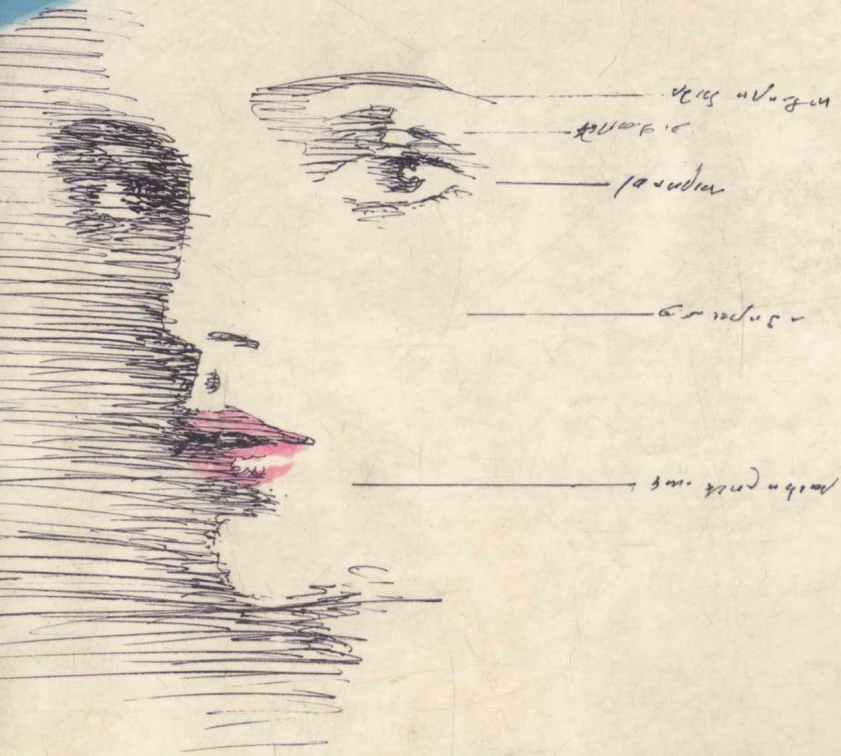
わたしは「顔師」

橋本直枝



わたしは「顔師」

橋本直枝

わたしは「顔師」

定価　九八〇円

昭和五十九年十月十四日　第一刷発行

著　者　橋本直枝

発行者　大沼　淳

発行所　文化出版局

東京都渋谷区代々木三の二二の一
郵便番号　一五一
電話（〇三）三七九―一三〇一（販売直通）
（〇三）三四五―三〇三六（編集直通）
振替　東京二―一九五六七〇番

印刷所　カバー・表紙　文化カラー印刷
本文　堀内印刷

製本所　明泉堂

0095-701450-7368　© Naoe Hashimoto 1984　Printed in Japan

プロローグ

私は顔師です。

「？」と思われるむきには、メイクアップ・アーティスト、と言い添えましょう。

でも、私はメイクアップ・アーティストではないのです。世の中でそう呼ばれる職業の者ではない、やはり「顔師」なのだと、はっきり断言できるのです。

ではなぜ世にあまりなじみのないこの名称に、かくもこだわるのか。

ことは今から三年ほど前、昭和五十五、六年にさかのぼります。

メイクアップ・アーティストという名前で私が呼ばれ始めたのは、今から二十数年前、昭和三七年ごろのことです。

以来、私は、メイクアップ・アーティストという言葉がとても好きでした。というのも私自身、ビューティとか、おしゃれとか、メイクアップとかを、すべてアーティスティックに考えていましたから。けれども、年月を重ね、経験を積むにつれ、「何か違うんじゃないか」「いえ、きっと違っている」という思いが、「ああ、私は顔師なんだ」という自覚にかわっていったのです。

ご存知のとおり、メイクアップ・アーティストにとって相手の「顔」はキャンバスと同じです。

キャンバスは、自分の芸術を表現するための道具です。そして、それが単に道具にしか過ぎないと感じた時、私は、あの、能面を彫る「面師（おもてし）」を思い浮かべたのです。

面師は、面を彫る時、その面の役柄になり切るものだと聞いています。つまり、面と己との一体化のうえで、面は彫られるのだと。

長い間メイクアップの仕事をしてきて、一番強く感じたのがこのことでした。

メイクをする相手との一体化、そして、その必然性でした。

メイクアップとは、人間の喜怒哀楽、そういった精神的なものをきっちりとふまえたうえで、相手の心の中に飛び込み、自分自身が相手と同じ心になってみて初めてつくられるものであり、その方の「顔」となるのだと気づいたのです。

「なら、わたしは面師のようなものね。でも、相手は面じゃなくて顔だから、『顔師』なのかしら」

けっして思い上がりでもなんでもなく、自然にそう思うようになったのが、三年前でした。

私は、顔づくりの相談を受けると、まず、相手と話すことから始めます。その人が何を望んでいるかを知り、その人の立場に立てるまで、時間にしてたっぷり一時間以上はかかります。舞台メイク、テレビ、映画、雑誌、コマーシャルと、私の手がけるジャンルは広いのですが、みな同じです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あれば原作も読み、台本も読み、さて、演ずるご本人はどのようになりたいのかを訊くわけです。経験上、これが一時間以上。

相手の気持ちさえつかめれば、あとは早いのです。説得しながら、一〇分か二〇分もあれば「顔」は出来上がってしまいます。

出来上がった顔を見て、その人が言ってくれます。

「わあっ、わたし、こういう顔になりたかったのよ」と……。

これは、相手がプロの俳優さんであろうと一般家庭の奥さま、お嬢さまであろうと、まったく違いはありません。いずれも同様に、相手の生活、環境、希望を言葉の中から察知し、吸収するのです。

近年、それが容易になったということは、私も本物のプロになったといえるわけで、だからこそ「顔師」という言葉を使い始めたに他なりません。

面を彫るのと同じ心境で、素直に顔に向かう。

化粧とは、心、精神、真実、そういうものであろうと思います。

そして、私がこのような思いに至るまでには、実に多くの方々との出会いがありました。「顔師」を自覚したきっかけから、みなさまご存知の方々との袖触れ合いの縁など、まずは私の「仕事」を理解していただくためにも、そんなところから始めてみたいと思います。

わたしは「顔師」　目次

プロローグ　1

第一部　スター達との出会い

「顔師」誕生　16

玉三郎さんの見事な変身　19

役になりきることの素晴らしさ——岩下志麻　21

イメージと実際がまるで違う——太地喜和子　29

メイク、変わりました——三田佳子　34

なんで私が泣かなきゃいけないの——真野響子　38

天下一品の目のお化粧——朝丘雪路　43

自分の顔が愛せる人——浅丘ルリ子　46

すべて任せてくださるから——有馬稲子　48

美しい眉に惚れました——江波杏子　50

素顔が素敵——大谷直子　52

自分のよさを知っている——大原麗子　54

本当の意味での対話ができる——小川知子　56

大人の顔にするのが難しい——加賀まりこ　57
小麦色の肌が魅力的——梶芽衣子　58
民謡の心を牽引する、人の大きさに触れました——金沢明子　59
顔はバランス——栗原小巻　61
プロが言うのだから本物です。お化粧上手なこの人——小柳ルミ子　65
永遠にラブコールを送ります——瑳峨三智子　67
静も激も演じることができるのに——高橋恵子　68
結婚式には腕をふるいました——多岐川裕美　69
ナチュラルが好き——竹下景子　73
健康は何より美しい——十朱幸代　74
粉化粧から始めました——中井貴恵　76
大きな舞台の一端を担えるのは爽快なこと——中村勘九郎　77
まれにみる美形です——夏目雅子　79
素直に認めてくれた丸い目の効果——波乃久里子　80
丸一日、どうして汗でくずれないの——新倉美子　82
美しさを知っている人——松坂慶子　84

メイクしてもらうのは、七五三以来初めてよ——水谷良重　85
新鮮さがかわらない——山口いづみ　86
着物一枚で、役の支配下に治めてしまえる——山本陽子　88
整形は両刃の刃（やいば）——A嬢　90

第二部　「顔師」として生きて

もとはといえば、パーマ屋で　98
資生堂ウーマン誕生す　100
夫婦は二世を契るというけれど……　102
資生堂からマックスファクターへ　104
懸命でさえあれば、心がわかる　108
デモンストレーターの恥ずかしい気分　111
何事も自ら試してみなくては……　114
化粧品の二元性、三元性を探す　117
私を見守り、支えてくれた人たち　120
人は財産だと言いますが　125

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

思えばうぶだった「お顔の美容体操」キャンペーン時代　129
支笏湖の幻想　132
芸術家気どりのメイクアップ・アーティスト　134
フィルム・メイクアップ――塗るからつけるの時代へ　139
まるで泰西名画を見るようなギル・カニエ氏のテクニック　143
おしゃれ上手の三つの顔　146
次なる出会い――女優　148
オセローの肌とデズデモーナの足　155
私の忙しくも充実した日々　161
給料に合わせた生活はしたくない　166
そして、独立　169
経営者になりきれない　170
「顔が変わったわ」と言われたいばっかりに　172
初めての辛酸　175
仕事が私を離さない　177
待っていた試練　181

幻想と幻聴と、そして悲しい六センチ　184
私の脚を同じにして！　188
「美」を忘れなかった心と、私を忘れなかった「人」　190
華やかな訪問客　193
押さえきれない義憤　199
五〇を前に、ゆっくり自分をみつめています　201

第三部　「顔師」からのアドバイス

禅を知る心　208
五つの「顔の施し」　211
お化粧は、まずポイントをみつけることから　214
ファンデーションは地肌が選びます　218
ファンデーションは流れにそって　220
アイシャドウ、大切なのは色のハーモニー　222
口紅は三本もって　223
百害あって一利もないシワ　224

眼鏡も顔を語る　226
歯の健康は、顔の輪郭も左右する　228
「色」を知る、「色」をこなす　229
舞台からの盗みのすすめ　233
化粧は心でするもの　238
この道ひとすじに　241
エピローグ　246

装幀・挿画　宇野亜喜良

わたしは「顔師」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com